然環境を保全するための住民の斗いが行なわれている。

私はバイパスや縦貫道路が完成したり、或は、桜川堤防を車輌交通に積極的に利用しても、今日の自動車禍は解決しないと思う。だからといって新しい道路の必要性を軽視しているわけではない。自動車が生活必需品として大きな比重を含めている現代ではあるが、政府の自動車化政策を根本的に、徹底的に改めない限り「車の脅威」から人間は解放されまい。自動車と道路問題だけを例に挙げても、経済と政治、企業と行政の悪循環、相互依存の体制を改めない限り、全て解決は不可能である。

住民運動には、その体質として一定の限界がある。しかし、限りない展望という面もある。私自身やはり住民運動の限りない展望という方に賭て、その意識の中で斗いたい。

今、土地の値上がり、物価の値上がり、日本中いたる所で国土改造計画の先き取り作戦が住民を踏みつけ、踏みつけズシンズシンと怪象の如くのし歩いている。報道される全ての事態は、国土改造が自然環境の凶悪なる敵であり、長期的展望に立つまでもなく、現下すでに住民の敵である。

私は「新関東」の九月号で「国土改造計画」は、ふくろだたきにあった不評の「新全総」のオブラートまぶしであり、ヒトラーのマイン・カンプが人間機械視の精神編であるならば、この改造計画は、その物質編であると書いた（瀕死の霞ケ浦）が、いま、ますますその感を深くしている。

二十一世紀の人類は核戦争、爆発的人口増加、そして環境破壊であるという。この何れもが基本的には全く解決の見通しのつかないままに、私達人間一人々々が自然環境の保守防衛とその復元のために斗っているということは、崇高な使命であり、新しい次元の積極的道徳である。昔農民一揆というものがあった。住民運動の一つである。将来環境を破壊するものに対し、住民一揆が起ら